

「わたしたちは主のものです」

2018年10月27日

ローマの信徒への手紙 14章7節～12節 わたしたちの中には、だれ一人自分のために生きる人はなく、だれ一人自分のために死ぬ人もいません。わたしたちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです。キリストが死に、そして生きたのは、死んだ人にも生きている人にも主となられるためです。それなのに、なぜあなたは、自分の兄弟を裁くのですか。また、なぜ兄弟を侮るのですか。わたしたちは皆、神の裁きの座の前に立つのです。こう書いてあります。「主は言われる。『わたしは生きている。すべてのひざはわたしの前にかがみ、／すべての舌が神をほめたたえる』と。」それで、わたしたちは一人一人、自分のことについて神に申し述べることになるのです。

パウロは、「わたしたちの中には、だれ一人自分のために生きる人はなく、だれ一人自分のために死ぬ人もいません。わたしたちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです」と語る。物凄い言葉である。私の全ては主イエスのものであるから、生きるのも主イエスのため、死ぬのも主イエスのためであると言っている。

パウロは、律法を厳守するファリサイ派に属し、将来を囑望されていた学徒であった。律法に熱心なあまり、十字架刑を受けたイエスをキリストと信じ、そのイエスは復活したと信じ、しかも、律法とエルサレム神殿を重視しないクリスチャンを許せず、迫害を加えた。モーセの十戒には「殺してはならない」とあるのに、クリスチャン殺害に燃える自己矛盾の中にあっただ。そのパウロは復活した主イエスに出会い、福音を受け入れ、決定的な回心をした。回心の内容について、ガラテヤ書1章12節で「わたしはこの福音を人から受けたのでも教えられたのでもなく、イエス・キリストの啓示によって知らされたのです」と書いているだけで、実態は定かではない。パウロは生きて来た全てを見透かされ、それを赦され、律法ではなく、信仰によって義とされ、神との和解に与る新生の救いを得たのである。その救いはパウロにとって、何ものにも変えられない歓喜、至福であったから、主イエスのために生き、死ぬと言い切ったのである。そして、あなたがたも皆、同じ救いに与っているのだから「わたしたちは主のものです」と言うのである。

キリストが十字架で死に、そして復活されたのは、死んだ人にも生きている人にも主となられるためであった。主のものとなった自分の兄弟をなぜ裁くのか、また、なぜ侮るのか。イザヤは、「わたしの口から恵みの言葉が出されたならば／その言葉は決して取り消されない。わたしの前に、すべての膝はかがみ／すべての舌は誓いを立て（イザヤ書45:23)」、また、「目を上げて、見渡すがよい。彼らはすべて集められ、あなたのもとに来る。わたしは生きている、と主は言われる（イザヤ書49:18)」と語っている。パウロは、これらの言葉を、「主は言われる。『わたしは生きている。すべてのひざはわたしの前にかがみ、／すべての舌が神をほめたたえる』と」とまとめ、全ての者が神の前に膝を屈め、神を賛美すると捉えている。だから、「わたしたちは一人一人、自分のことについて神に申し述べることになるのです」と、終わりの日、神の裁きの座の前で、申し述べることになる警告している。パウロは、私たちは皆、主イエスのものであるから、裁き、侮り合うのは止めなさいと、牧会的配慮をもって忠告しているのである。